

更なる進化に向けて!!

瓊浦

第1号

令和元年7月22日発行

瓊浦高等学校

住所 長崎市伊良林
2丁目13番4号

電話 826-1261(代)

FAX 820-5245



令和初の県高総体

優勝旗4本獲得

六月一日から始まった長崎県高等学校総合体育大会。県内各地で多くの熱戦が繰り広げられ、多くのドラマが生まれた。五月から新元号「令和」となって初の県高総体。まさに、新たな時代の幕開けとなった今大会、瓊浦高校の生徒たちは各会場で大いに躍動した。

何と言っても県内でトップとなる四本の優勝旗。五連覇を果たした男子バドミントンをはじめ、二年連続優勝となる空手道男子、昨年のリベンジを果たした男子ハンドボール、六年ぶりの総合優勝となったボクシングと、その週の新聞記事を瓊浦の文字で埋め尽くす程の大活躍。それぞれが優勝候補と言われたプレッシャーをものともせず、日ごろの厳しい練習の成果を発揮した結果であろう。

惜しくも優勝旗こそ逃したものの、男子バスケットボール、卓球男子の準優勝も立派な成績である。男子バスケットボールは久方ぶりの決勝リーグ進出。決勝では長崎西高に敗れてしまったものの、新体制の総決算となる今年、コンゴからの留学生アノルドを擁するなど県準優勝という結果を出し、バスケットボール界に瓊浦の名を大いに轟かせてくれた。

その他にも卓球女子、空手道女子、水泳男女、女子ハンドボールのベスト4。女子バレーボール部の十五年ぶりの復活など、話題の事欠かなかった今年の高総体。ここ数年の勢いそのままに、新たな時代でも「瓊浦」の大活躍を予感させる戦いぶりであった。

また、個人戦においても多くの生徒が活躍し、上位大会に駒を進めた。陸上男子の林田(情3A)は、二五〇〇m、五〇〇〇mの二冠を達成。全国優勝を十分に狙えるその実力を遺憾なく発揮した。剣道部男子の氏福(機3C)、楠本(普3A)は個人戦第三位。全国大会常連校をおしのけ、見事九州大会の切符をつかむ快挙であった。

選手達の活躍はもちろんのこと、応援も注目を集めた大会だった。応援団を中心に、事前練習を重ねて臨んだ男子ハンドボールの決勝戦。昨年度は、地元長崎開催でありながらも、相手校の応援に圧倒され、自分たちの応援が出来なかった。結果としてチームも準優勝に終わり、苦杯をなめる結果となった。選手達はもちろんだが、応援側もリベンジの機会と位置づけ、迎えた決勝戦。会場が遠方ということもあり、全校応援とまではいかなかったが、バス三台で駆けつけた瓊浦のスタンドは大きな盛り上がりを見せ、相手校の応援を圧倒する勢いであった。応援の甲斐もあってか選手達は危なげないプレーで見事優勝。改めて応援の力を感じた瞬間でもあった。

今年の全国大会、インターハイは八月初旬、南九州地区で開催される。本校からも先に述べた四つの部を筆頭に、総勢四十三名の生徒が出場予定である。男子バドミントン部、男子ハンドボール部は、先日行われた九州大会でどちらも準優勝と、全国でも優勝を狙える力を持っている。その他の部でも、上位進出を狙える選手が多数存在する。長崎を飛び越えて全国という大舞台へ。更なる頂を目指す戦いはまだまだ続く。今年の夏も熱くなりそうだ。

普段私たちは、なるべく楽をしようとして、正解までの近道を探している。それは当たり前。前の考え方であるし、間違っているとはいえない。しかし、近道を通ってたり着いた正解には「深み」は出ない。なかなか上手いはず、努力を重ね、失敗し、それでも諦めず、試行錯誤を重ねた先にたどり着いた正解。たとえ同じ答えであるとしても、それまでに重ねた経験全てが「深み」に繋がるのではないだろうか。

それでも失敗はしたくない。けれども失敗をしない人生なんてありえない。失敗を恐れない。そうした考え方こそ、後の成功に必要なものかもしれない。今年度の県高総体でも多くの生徒たちが活躍し、多くの生徒たちが上位大会へ駒を進めた。そこには素晴らしい努力があり、たくさんの失敗があったことだろう。そして、そうした華々しい活躍の裏では、結果を出せず、夢半ばで敗れた生徒たちも数多く存在する。しかし、そうした生徒たちのこれまでの経験もまた、これからの人生に大いに役立つであろうことは想像に難くない。

「速回りが一番の近道。引退会見の際に「後悔などあるはずがない」と断言したイチロー選手のように、悔いの残らないよう、何事にも全力で取り組むものだ。

たまたまのうら

二〇一九年三月二十一日、一人の野球選手が現役を引退した。その選手の名はイチロー。言わずと知れた、野球界のみならずスポーツ界の生ける伝説的選手である。日本プロ野球のシーズンMVP、首位打者や打点王といった数々のタイトルをはじめ、メジャーリーグでの大活躍。野球を知らない人でも、イチロー選手の名は知っているという人がほとんどではないだろうか。そして、二〇〇四年のシーズン二六二安打。メジャーリーグの長い歴史を塗り替えた大記録に世界中が興奮したことは未だに記憶に新しい。その他にも第一回二回のWBC(ワールドベースボールクラシック)での活躍。特に、第二回大会決勝戦での優勝を決めた決勝打のシーンは今でも目に焼き付いている。

まさに日本を代表する打者、そんなイチロー選手が、数年前にあるインタビューで語った内容が印象的だった。それは自身で「失敗」について尋ねられた時の回答である。「全く失敗無しで正解にたどり着くなんてありえない。もしたどり着いたとしても、そこに深みは出ない」。さらに「無駄なことは無駄じゃない。速回りをすることが一番の近道」と語っている。

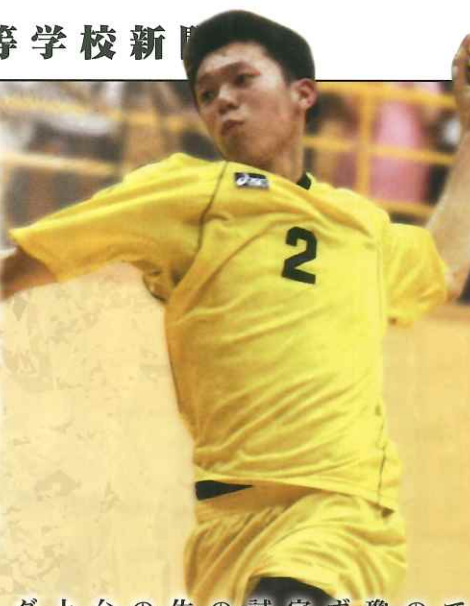
日本、アメリカで大成功を収め、前人未踏の偉業を成し遂げてきたイチロー選手の言葉だからこそ、真の深みを感じられる。長い野球生活の中では、当然上手いことあることもあっただろうし、多くの失敗もあったことだろう。しかし、そんなイチロー選手だからこそ気づけた「速回りが一番の近道」という、まさに金言。

普段私たちは、なるべく楽をしようとして、正解までの近道を探している。それは当たり前。前の考え方であるし、間違っているとはいえない。しかし、近道を通ってたり着いた正解には「深み」は出ない。なかなか上手いはず、努力を重ね、失敗し、それでも諦めず、試行錯誤を重ねた先にたどり着いた正解。たとえ同じ答えであるとしても、それまでに重ねた経験全てが「深み」に繋がるのではないだろうか。

王座奪還

男子ハンドボール部

2年ぶり 県V



県大会決勝の相手は、永年のライバル長崎日大高校。今のチームになってからは、新人戦、春季戦と勝ってきた相手ではある。しかし忘れもしない一年前の県高総体。決勝の相手は同じ長崎日大高校。戦前の予想では瓊浦有利と言われながら、終わってみると惜敗。悔しすぎる準優勝という結果に終わった。

昨年の雪辱を果たすべく臨んだ今年の県高総体。二年生に好選手が揃う今年のチームにあって、決勝で躍動したのはやはり昨年の悔しさも知った三年生だった。キャプテン棚町はチームトップの八得点。キーパー加藤は好セーブを連発し、会場を大いに盛り上げた。終始落ち着いて試合運びで、試合開始から終了まで一度もリードを許すことはなく、見事に県大会優勝を勝ち取った。その危ない戦いぶり、これからの九州・全国の舞台で大活躍を予感させるものであった。コートの中だけではない。応援スタンド

でも戦いは繰り広げられていた。昨年度の決勝戦は長崎会場での開催。つまりは、瓊浦のホームで行われた。にもかかわらず、応援の質・量ともに長崎日大高校に完敗。試合の敗退同様に、悔しさが残る試合であったのは想像に難くない。昨年のリベンジを期して迎えた今年の決勝戦。

佐世保開催ということもあり、全校生徒の動員とまではいかなかったが、バス三台で駆けつけた応援スタンドは、例年以上に気合いが入っていた。応援団、リーダーを中心に、熱のこもった応援。点が入る度に巻き起こる拍手と歓声。それは誰がどう見ても、相手側スタンドを凌駕しており、応援においても昨年の屈辱を晴らすことができたと言ってよいだろう。今年の応援団で団長を務めた小川原(普3C)は、「昨年のももあつたので、とにかく優勝できてよかった。応援もみんなが協力してくれ、盛り上がりがあったと思う。自分たちの応援が少しでも選手達の力になってくれたのなら嬉しい」と試合後に語ってくれた。

全国に先駆けて行われた九州大会では見事準優勝。準決勝では強豪大分高校を下し、決勝で敗れたものの、全国でも優勝候補の一角と言われる沖縄の興南高校を相手に四点差と十分互角に戦える力を見せてくれた。インターハイに向けてキャプテンの棚町(普3A)に話を聞くと、「三回戦まで勝ち進むと、昨年度主要大会三冠の水見高校(富山)。強豪だけど、この試合にしっかり勝って勢いをつけること



で上位進出、全国制覇を目指したい。とにかく三年間の集大成の大会なので、これまでやってきた全てのことを力に変えて、悔いの残らない試合にしたい」と頼もしいコメントを残してくれた。

昨年の悔しさをバネに、全国への切符を手にした男子ハンドボール部。インターハイは八月四日から熊本で行われる。会場である熊本、山鹿は、男子ハンドボール部が全国制覇を成し遂げた記念の場所。そんな縁起の良い場所である。今年のチームはどのような戦いを見せてくれるのだろうか、期待は高まるばかりである。

貫禄の戦い 目指すは 全国の頂点

男子バドミントン部 県高総体 5連覇 達成



見ている世界が違う。そんな戦いぶりだった。男子バドミントン部は、今年度の県高総体においても、他校に全く付けいる隙を与えず、五年連続の団体優勝を勝ち取った。また、シングルス、ダブルスでもベスト4を独占するなど圧倒的な力の差を見せつけ、改めてそのチーム力の充実ぶりを発揮する大会となった。

県では勝って当たり前。むしろチーム内のライバル達にいかにして勝つか。

春の全国選抜では団体ベスト8。ここ数年で、全国トップレベルの強豪校と十分に渡り合う力をつけ、日本中にバドミントンの強豪校として名前が知れ渡るようになった。そんな名門校としての貫禄を十二分に見せつけ、県内に敵無しというところを改めて感じさせる県大会であった。県高総体はこれで五連覇。顧問に現在の林先生が就任して以来、「全国に出られる」チームではなく、「全国で勝てる」チーム作りに着手してきた。その成果が現れてきた今年、これまで以上に全国との差は縮まってきたと感じさせるだけの力が今のチームにはある。主将の町(普3B)は、「昨年のインターハイ、今年の全国選抜大会と団体戦はベスト8止まりで悔しい思いをした。自分たちの力をしっかりと発揮できればもっと上、全国優勝も夢ではないと思う。実際に全国の強豪たちと戦い、誰が相手でも十分に戦うことができる自信はある。これまでの悔しさを晴らし、ぜひ全国の頂点に立ちたい」と現在のチーム状況、全国大会への思いを語ってくれた。また、チームのポイントゲッターとなる中島(普3B)は、「自分の勝敗がチームの勝敗に関わることが多いので、やりがいのある分、緊張感もある。ただし、今の力ならどの学校と試合をしても、一方的に負けるということはないと思う。自分たちのこれまでの練習に自信を持って、最後の高総体で全国制覇を成し遂げた」と熱い思いを語った。

全国大会の前哨戦となる九州大会では、熊本の八代東に惜敗し、悔しい準優勝という結果に終わった。けれども、全国上位の常連八代東相手に互角の戦いぶり、あと一步の所まで追いつめたその力は、全国の強豪校相手にその力が通用するということの再確認にもなった。本番は夏、インターハイの舞台。着実に力をつけ、全国の頂を目指す瓊浦バドミントン部。その活躍に大いに期待したい。

準決勝までの戦いを危なげなく勝ち進み迎えた決勝戦。相手は、例年同様ライバル鎮西学院。この十数年変わらない決勝カードに、会場のボルテージは最高潮に達した。このメンバーになってから負けていないということもあってか、応援スタンドの雰囲気は「大丈夫」「勝つてくれるだろう」という安心感のようなものが漂っていた。それが選手に伝わったわけではないだろうが、試合は序盤から劣勢を強いられることになる。1、2シングルの奪われ、いきなり後が無くなる展開。特にキャプテンであり、チームのエースである中原（機3B）の敗戦は予想外のものであった。順当に行けば、個人戦でも県優勝、インターハイ出場は間違いないうだろうと目されているエースの敗戦は、会場全体を「まさか」と思わせる出来事であった。

そうは言っても、この先の布陣を見ると大丈夫。事実、ダブルス以降のメンバーを見ると十分に勝ちが計算できる状況であり、まだ逆転優勝の可能性は高いと思われた。実際にダブルスでは相手を圧倒し、ここから瓊浦の反撃が始まると期待した観客も多かったに違いない。けれども、結果としてそうはいかなかった。

四番手の浅野（普3D）、五番手の山根（普2A）ともに前半は快調な立ち上がりだった。両者とも相手をリードして、あと1ゲームというところまで迫りながらの逆転負け。一度狂いだした歯車はなかなか上手くは回らなかった。終わってみると1-4の完敗。昨年に続く団体優勝はならず、団体でのインターハイ出場も叶わなかった。続いて行われた個人戦でも中原、浅野の三年生の調子が上がらず、鎮西学院の後塵を拝することとなった。改めて、高総体という一発勝負の難しさ、そして卓球という競技がメンタルスポーツだということを思い知らされる結果であった。しかし、そんな中にも来季への光も見えた。シングルスで二位に入った

山根、ダブルスで二位に入った西嶋・谷藤は全員二年生。三年生が抜けた後のチームを支える三人が、今年のインターハイに個人で出場できることは非常に大きい。そしてこの三人を中心に、来年度は必ずや雪辱を果たし、再度優勝旗を瓊浦に持ち帰ってくれるだろうと大いに期待したい。

予想外の結末だった。昨年の県高総体、秋の新人戦と団体優勝を果たし、優勝候補筆頭、第1シードで迎えた県高総体。そこにはまさかの落とし穴が待っていた。



卓球男子 団体戦準優勝 敗者の無念 力及ばず

あと一歩 卓球女子 ベスト4

まるで、昨年の映像を見ているかのようだった。

県高総体団体戦準決勝、相手は鎮西学院。2-2で迎えた五番手同士の決戦、このゲームを取った方が決勝進出…。

「勝負は時の運」という言葉があるが、まさにどちらに転んでもおかしくない展開だった。同時刻に始まった試合は全て終了し、会場全体がこの準決勝の行方を見守った。準決勝が始まってから二時間半、瞬きも出来ないぐらいの緊張感の中、遂に決着を迎える。あと一歩、今年も届かなかった準決勝の壁。結果としては、2-3で惜敗。団体戦はベスト4で幕を閉じた。三年生が引退すると、女子部員は二名のみになり、秋に行われる新人戦にも団体戦に出場できないことになる。そうしたことから、今回の県高総体はぜひとも勝ちたかった。

気持ちを切り替えて臨んだ個人戦。三年生の中村（普3B）はシングルス、ダブルス共に準優勝を果たし、見事インターハイへの出場権を獲得した。田中もダブルスで出場権を獲得し、昨年度から組んでいるエースペアで、全国の大舞台を戦うことが決まった。昨年は留学生の黄がいた。今年にはペアを組んでいる中村がエースだった。そして、これからの瓊浦女子卓球部を背負っていくのは間違いなく自分。先輩と戦う最後のインターハイ。自分たちの力を精一杯出し切り、これからの成長の糧になる良い経験をしてもらいたい。

インターハイに向けて二年の田中は「長崎の代表として、瓊浦の代表として、恥ずかしくないプレーをしたい。来年は自分たちの代になるので、良い経験にしたいと思う」と抱負を述べた。また、新チームについては、「これまで以上にエースとしての重圧がかかると思うけれど、それをはねのけて良い結果を残したい。今までの瓊浦の伝統を汚さないよう、まずは新人戦でシングル優勝を目指したい」と語ってくれた。来年こそは自分たちの力で、また新たな時代を切り拓いていってほしい。

全九州高等学校総合体育大会

バドミントン部 **団体 準優勝**
ダブルス 優勝 中島 巧・杉本 一樹
準優勝 町田 脩太・永淵 雄大
シングルス 第3位 町 祥英

ハンドボール部 **準優勝**

シング **ウェルター級 第3位** 池野 海斗
ライト級 第3位 川口 彪吾

男子バドミントン部 Men's badminton

団体 優勝 IH出場権獲得!!
 二回戦 瓊浦3-0向陽
 三回戦 瓊浦3-0長崎南
 準々決勝 瓊浦3-0佐世保北
 準決勝 瓊浦3-0長崎工業
 決勝 瓊浦3-0佐世保実業

ダブルス 優勝 中島 巧(普3B)・杉本 一樹(普3B) **IH出場権獲得!!**
準優勝 町田 脩太(普2D)・永淵 雄大(普2D) **IH出場権獲得!!**
第3位 町 祥英(普3B)・山下 晃誠(普3B)
第3位 立石 夢希(普3B)・高月 颯人(機3A)

シングルス 優勝 中島 巧 **IH出場権獲得!!**
準優勝 町 祥英 **IH出場権獲得!!**
第3位 中村 恵太(普2D)
第3位 杉本 一樹

女子バドミントン部 Women's badminton

一回戦 瓊浦3-0佐世保東翔
 二回戦 瓊浦0-3諫早商業

ボクシング boxing

フライ級 優勝 栗崎倫太郎(機3B) **IH出場権獲得!!**
ライト級 優勝 川口 彪吾(機3C) **IH出場権獲得!!**
ウェルター級 優勝 池野 海斗(普3D) **IH出場権獲得!!**
ミドル級 優勝 脇濱 智輝(機3C) **IH出場権獲得!!**

剣道部 kendo

団体の部 男子
 予選リーグ 瓊浦3-0佐世保高専
 瓊浦4-0長崎南
 瓊浦0-3西陵

女子 ベスト8
 予選リーグ 瓊浦1-0諫早
 瓊浦3-2清峰

準々決勝 瓊浦0-3島原

個人の部 男子個人戦
第3位 氏福 勝太(機3C)
第3位 楠本 晃聖(普3A)

ソフトテニス男子 Men's soft tennis

団体の部
 一回戦 瓊浦0-3波佐見

陸上競技部 Athletics

男子 1500m 優勝 林田 洋翔(情3A)
男子 5000m 優勝 林田 洋翔
男子 800m 第6位 一ノ瀬結人(普3A)
女子 3000m 第4位 古本 紗彩(普2D)
女子 800m 第5位 石本 真歩(普3B)

サッカー部 Football

二回戦 瓊浦1-2佐世保工業

水泳部 swimming

男子総合 第4位

男子 50m 自由形 準優勝 田中 修人(情3A)
男子 100m 自由形 準優勝 田中 修人
男子 4x100m R 準優勝 竹野(機1C)・宮野(機2B)・福島(普2B)・田中

男子 50m 自由形 第3位 竹野 友貴
男子 4x100m xドレー-R 第4位 宮野・川口(情1B)・原田(機2A)・田中
男子 4x200m R 第4位 平(機2B)・宮野・川口・田中
男子 200m バタフライ 第6位 原田 聖太

女子総合 第3位

女子 400m 自由形 優勝 原口くる実(情3B)
女子 800m 自由形 優勝 原口くる実
女子 4x200m R 準優勝 村川(情1A)・小川(普3B)・原口・釜田(普1C)

女子 200m 平泳ぎ 第3位 中村 絢香(情3A)
女子 4x100m xドレー-R 第3位 小川・中村・原口・釜田
女子 50m 自由形 第4位 釜田 莉鈴
女子 100m 自由形 第4位 釜田 莉鈴
女子 200m 自由形 第4位 村川 樹桜
女子 4x100m R 第4位 中村・釜田・村川・原口
女子 100m 自由形 第6位 村川 樹桜
女子 100m 背泳ぎ 第6位 小川 優美
女子 100m 平泳ぎ 第6位 中村 絢香
女子 200m 平泳ぎ 第6位 大町 里菜(情1B)



○ 空手道部 Karate

男子団体組手 優勝 IH出場権獲得!!

準決勝 瓊浦3-2 猶興館

決勝 瓊浦3-2 長崎日大

女子団体組手 ベスト4

準々決勝 瓊浦4-1 佐世保商業

準決勝 瓊浦0-5 長崎日大

男子個人組手 準優勝 草場 一慧 (機3B) IH出場権獲得!!

女子個人組手 準優勝 大楠 平華 (情2A) IH出場権獲得!!

全国高等学校陸上競技対抗選手権大会
北九州地区予選大会

○ 陸上競技部

男子 1500 m

優勝 林田 洋翔 IH出場権獲得!!

男子 5000 m

第3位 林田 洋翔 IH出場権獲得!!

○ 男子バスケットボール部 Men's basketball

準優勝

二回戦 瓊浦 149 - 75 清峰

三回戦 瓊浦 93 - 75 長崎日大

準々決勝 瓊浦 86 - 65 長崎工業

準決勝 瓊浦 91 - 81 長崎東

決勝 瓊浦 76 - 99 長崎西

○ 女子バスケットボール部 Women's basketball

二回戦 瓊浦 91 - 39 長崎北陽台

三回戦 瓊浦 57 - 65 鎮西学院

○ 男子バレーボール部 Men's volleyball

一回戦 瓊浦 2 - 0 創成館 二回戦 瓊浦 0 - 2 長崎南山

○ 女子バレーボール部 Women's volleyball

一回戦 瓊浦 0 - 2 対馬

○ 男子ハンドボール部 Men's handball

優勝 IH出場権獲得!!

二回戦 瓊浦 48 - 11 長崎北陽台

準決勝 瓊浦 24 - 6 長崎工業

決勝 瓊浦 28 - 19 長崎日大

○ 女子ハンドボール部 Women's handball

ベスト4

二回戦 瓊浦 24 - 11 長崎南

準決勝 瓊浦 12 - 15 佐世保西

○ 柔道部 judo

男子団体

予選リーグ 瓊浦 3 - 0 壱岐

瓊浦 3 - 1 諫早農業

決勝トーナメント 瓊浦 1 - 3 長崎東

女子団体

決勝トーナメント 瓊浦 0 - 1 佐世保工業

女子個人 48kg級 準優勝 栗山 瑛 (普2A)

○ 卓球部 Table tennis

男子団体 準優勝

二回戦 瓊浦 3 - 0 松浦

三回戦 瓊浦 3 - 0 中五島

準々決勝 瓊浦 3 - 0 佐世保工業

準決勝 瓊浦 3 - 0 鹿町工業

決勝 瓊浦 1 - 3 鎮西学院

女子団体 ベスト4

一回戦 瓊浦 3 - 0 佐世保西

二回戦 瓊浦 3 - 0 大村

準々決勝 瓊浦 3 - 0 佐世保商業

準決勝 瓊浦 2 - 3 鎮西学院

男子ダブルス

準優勝 西嶋 茂哲 (普2A)・谷藤 仁奎 (普2A) IH出場権獲得!!

男子シングルス

準優勝 山根 敏和 (普2A) IH出場権獲得!!

第3位 中原 湧斗 (機3B) IH出場権獲得!!

第3位 牧山 航太 (普3B) IH出場権獲得!!

女子ダブルス

準優勝 中村 羽衣 (普3B)・田中 彩香 (普2D) IH出場権獲得!!

第3位 後藤 里沙 (普3B)・小浦 萌 (普3A)

女子シングルス

準優勝 中村 羽衣 (普3B) IH出場権獲得!!



○ 男子

○ 男子

○ ボク

15年の復活 女子バレー部 県高総体出場



六月一日、純心女子高等学校体育館で女子バレーボールの県高総体が行われた。十五年という休部期間を経て、今年度四月から久しぶりの復活となる瓊浦女子バレーボール部。三年生一人、一年生十人という体制で迎えた初の県高総体。前の試合が長引き四十分遅れのスタートとなったが、試合前の練習風景を見ても、選手達は落ち着いて試合に臨もうとしている様子が見られた。



そして始まった初戦、相手は対馬高校。先制点は対馬に取られるが、瓊浦女子バレー部も、攻めの姿勢を崩さず何とか食らい付く。しかし、相手の高さに押され、なかなかスパイクを決めることが出来ない。結果として、対馬に追いつくことができず、1セット目は、12-25でセットを奪われる結果に。だが、生徒達に諦めの気持ちは見られなかった。

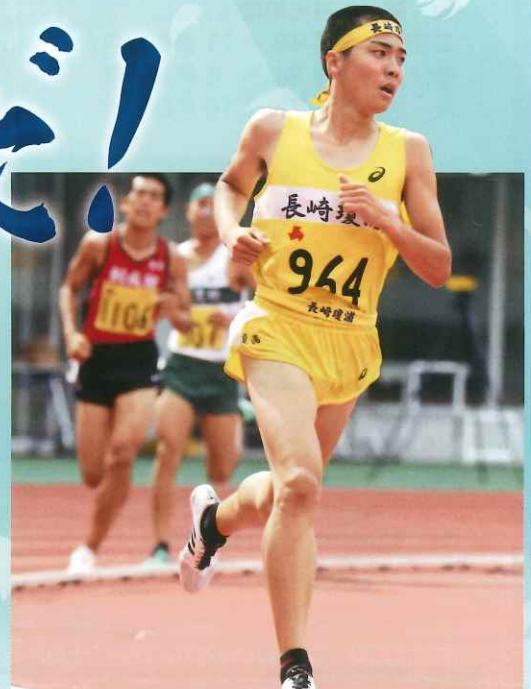
続く2セット目、瓊浦がリードを取り、優位な状況に。対馬も負けじと戦い、長いラリーが続いた。

互いに譲らないシーソーゲームの中で、瓊浦に疲れがきたか、徐々に点差をつけられていく展開に。そのまま試合が終了し11-25という結果で対馬高校に2セットを連取されての敗退となった。終わってみれば、実力の差を見せつけられての初戦敗退となり、見事初陣を飾るというわけにはいかなかった。

試合後、顧問の黒川先生は「一年生は頑張ったけど残念だった。三年生は一人で一年を仕切ってくれたので、ありがたかった。まだまだこれからのチームなので、また頑張りたい。」と語ってくれた。

今回は、一回戦敗退という結果に終わったが、初めての高総体、相手高校との経験の差もあつたなか、白熱した試合を見せてくれた女子バレーボール部。この敗戦は、終わりではなくスタートだ。これからの瓊浦女子バレーボール部の成長、更なる飛躍に大いに期待したい。

狙うは全国の「頂」だ！ 林田くん(情3A) 圧巻の走りで全国へ！！



まさに別次元のスピードだった。今年の長崎の長距離は面白い。巷でそう騒がれるほど、今年の長崎の高身長距離はレベルが高かった。多くの選手が一流選手の条件である五〇〇m十四分台を出し、中には十四分前半の選手も存在する今大会。そんな長崎県で一五〇〇m、

五〇〇mの長距離種目二冠を達成したのが林田(情3A)だ。並み居る強豪を寄せ付けず、圧巻の走りで見事長崎の頂点を手にした。

そして迎えた北九州地区予選。先に行われた一五〇〇mを圧巻のスピードで制した林田。男子五〇〇mでは外国人留学生二人が飛び出し、三位を有力な日本人選手が争うという戦前の予想通りの展開。共に三位を争ったのは同じ長崎県勢、同じ桜が原中学校出身のライバル花尾(鎮西学院)であった。中学校時代から大事な試合で勝利してきたのは林田。県大会でも同種目で林田が勝っている。しかし、五〇〇mのベストタイムでは花尾が上。まさにライバル同士の直接対決。残り三〇〇mから林田がスパートをかけ、勝負が動いた。花尾もすぐに反応し、スパート勝負となるものの、そこは一五〇〇m王者である林田の独壇場。見事、日本人最高位の三位入賞を果たし、全国大会への切符を手にした。県大会、北九州大会を振り返って顧問の山川先生は、「林田がこれぐらい走れるのはある意味予想通り。これまでなかなか調子が整わなかったが、上手く本番に合わせてこれだと思う。これから調子を崩すこと無く、全国の頂点をぜひ獲ってもらいたい。そして、その力は十分にあると思っている」と語ってくれた。

中学校時代に全国王者の経験を持つ林田。高校最後の夏、大舞台でどんな走りを見せてくれるのか、非常に楽しみである。

2019年度2学期行事予定

8月	23日	始業式
	27日	第2回実力考査①②
	28日	体育祭特別時間割(〜6日)
	30日	PTA委員会
9月	6日	体育祭予行練習
	7日	体育祭
	9日	振替休日(体育祭)
	11日	就職出陣式③
	13日	入試説明会(中学校)
	14日	対外模試③
	16日	就職選考試験開始
	17日	第1回進路模試②
	28日	第3回学校見学会
10月	1日	中間考査(〜4日)
	3日	地区別入試相談会(〜2日)
	3日	振替休日(学校見学会)
	4日	後期委員任命式
	8日	勤労体験学習②
	12日	Challenge21(〜14日)
	23日	献血(〜24日)
	25日	球技大会
	26日	対外実力試験
	31日	私学振興大会
11月	1日	瓊浦祭(〜2日)
	5日	振替休日(瓊浦祭)
	6日	高総体駅伝競技
	8日	県高総体文祭(〜10日)
	21日	自動車学校入校説明会③
	28日	学年PTA③
	28日	期末考査(〜3日)
12月	4日	人権教育
	10日	インターシップ(〜13日)
	17日	大学見学会①②
	20日	終業式